

第6回松本市動物愛護管理推進懇談会 議事録

- 1 日 時 令和6年7月4日（木曜日） 午後2時から午後4時まで
- 2 場 所 松本市役所 本庁舎3階 第一応接室
- 3 出席者 委員長：竹田謙一
 委員：北村理恵子、国本和哉、東條博之、等々力茂義、
 福澤美雪、降籟弘雄、箕輪さくら
 オブザーバー：須田正典（長野県 健康福祉部 食品・生活衛生課）
 事務局：大和真一、半田八重、藤岡瞳、丸山楓貴（松本市 食品・生活衛生課）
- 4 懇談事項 動物愛護センター機能のあり方について
- 5 議事録

(1) 動物愛護センター機能のあり方について

発言者	発言内容
北村委員	市民のボランティアの育成とか市の団体とかっていうことがあると思うんですけども、育成する上で長野県とか松本市という中での育成というのはその地域だけのレベルになってしまいがちなので、県外からの講師や、犬で言うと優良家庭犬普及協会みたいなテストとかがいろいろあると思うんですよ。 そういうのをぜひ市民の方にチャレンジしていただいて全体的なレベルアップができればいいかなと思っております。
国本委員	箱物ができるかできないかで全然お話が違ってくると思うんです。 北村委員がおっしゃられた、市民が参加できるようなイベントみたいなものを6番目に入れて欲しいと思うんですが、そうするとどの部屋に行ったらいいのか、そんな話になってしまうと思うのですが、みんなが気軽に参加できるようなセンターというのも大事なんじゃないかなと思いました。
竹田委員長	箱物がどうかというのはあるんですけど、今日はそういう話はしないつもりです。ただし、当然機能強化とか、こういう機能は必要だとすれば、それに基ついて青写真として将来的にはこういう箱が必要ってことで繋がってくるので、遠慮なさらずに何か思いがあればぜひこの場で伝えていただければと思います。
国本委員	一点言わせていただければ、ハローアニマルと同じものを作ってもしょうがないかなとは正直思います。
大和（事務局）	今委員長からもお話ありましたが、今時点で施設設備について積極的に発言ができない状態にあります。そこは委員の皆さんのご理解をいただきながら、こういう機能を持たせるにはこういうものが必要だというお話はしていただければと思います。 例えば北村委員の資格の話や、全体のレベルアップの話だとか、国本委員の市民参加のイベント等とかはどこか会場を借りてやるとか、いろんなやり方があります。 実は、報告の中で普及啓発でお話させていただいた6月の動物の正しい飼い方普及月間の取り組みで、県が主催の事業で、長野駅と松本駅の街頭で啓発のグッズを配る取り組みを県で計画をされて、松本市は場所の確保などを行い、一緒に啓発をさせていただきました。 松本市内では初めてで、長野市保健所が独自で昔からやっていましたが、私も参加させていただき結構たくさんの方に配ることができ、意義があったと思いますので、こういうことができればということは自由にご意見を出していただければありがたいと思います。
東條委員	二点あるんですが一つは、この負傷動物っていうのはどこまでを想定していますか。
大和（事務局）	基本的に保健所でやるのは犬猫で、野生動物とか鳥が死んでるとかは森林環境部に繋げさせていただいています。 獣医師会さんに負傷動物の治療委託をさせていただいていますが、それも基本、犬と猫ということでお願いしています。

東條委員	<p>県の林務部の方で方針が変わり、自然の動物については、落ちてたとしても手を出さないという方針になりました。</p> <p>獣医師会への委託業務もなくなりました。ただ獣医師会としては、もしそういうものを動物病院に持ち込んだときには、ちゃんとやるんですけど、一応そういうこともあるので犬猫の場合、獣医師会と連携をうまくやってもらって獣医さんたちと自然ににそういうことはこうだよっていうのをやっていくことがやっぱり重要なというのが一点でございます。</p> <p>それから、危機管理のところで、ペットの災害研修会をやりましたが、ある程度の方が集まっていたので、いろんな意見が出て今年また一般まで広げてやりたいと思っています。この中で備蓄ですが、例えば物資の備蓄とか県と市で何とか協力して場所を確保するとか借りるとか、今日県も来てらっしゃるのでそういうのを工夫して建物は別として、いつ災害が起こるかわかりませんので早めに準備をすることが必要なと思います。</p> <p>あとVMA Tの話が去年出たんですけど、なんか石川の話聞くとVMA Tってあんまりうまくいかなかったというので、その辺はまたこれから獣医師会としても考えていかなきゃいけないなというふうに考えてますのでよろしくをお願いします。</p>
等々力委員	<p>動物愛護センターという名称がこれから非常にいいかなと思います。</p> <p>先日の多頭飼育現場で松本市の保健所の職員だということとシャットアウトされたような現場もあり、動物愛護センターという名称の方が柔らかくていいと思います。</p> <p>保健所というイメージより愛護センターというイメージにして、広げていけばいいと思うのと、18ページの4番にあるように相談支援ということで、この前の県の講習会でも話がありましたが、指導というイメージが一般の方であって、指導に来られるのは嫌だという意味ではこの支援という言葉を使って非常にいいと思いました。</p> <p>多頭飼育の方もそうですし、地域猫の方もそうですが保健所というより愛護センターとか、支援にきましたとということを表に強く打ち出しながらやっていただければいいかなと思いました。</p>
竹田委員長	やっぱり保健所っていうと何か拒否反応が強いですか？
等々力委員	そういう現場が最近でもあったようですので。
竹田委員長	むしろ皆さんと同じ立場ですよとか、同じ目線で向いてますよというイメージ。
等々力委員	保健所と言うより愛護センターと言ったほうが、それだけでも違うとは思いますが、あとはボランティアとうまく連携していくことですね。
大和（事務局）	<p>実はこれはうちの方のアプローチがいけなかったのかもしれないですが、保健所ですって言うのと昔のイメージで動物で殺処分をしてしまう所というイメージを結構お持ちの方が多くて、保健所に話すことはないとかいうような具合になって、そこから入り込めない場合があり、多くのケースの場合、福祉サイドの方が先にアプローチしていることが多いので、そういうときは福祉サイドの方と一緒にやって動物のことは対応しますというような事例も複数あります。</p> <p>その辺はうちとしての困ってる方へのアプローチの仕方については考えていかなきゃいけないと思います。</p>
竹田委員長	元に戻りますが、国本委員、犬の関係でも、保健所が来るっていうようなイメージと愛護センターが来ましていうのでは、全然受け止め方ってのは違うんですか。
国本委員	全然違う。作業着で行って動物愛護センターですって行くのと、ラフな格好で行くのと全然違うしそういう環境の人の接し方は、なかなかプロがやらないと心は開いてくれないのが普通じゃないでしょうか。

降籟委員	最初が一番肝心で、行くにもどういう人なのかを全部調べておいて、それでスーツで行くのか、ざっくばらんな格好で行くのかを決めておかないとその段階でもう相手が決めちゃうから、入り込んでいけるためには事前の情報が必要。
国本委員	うちは一番最初はジュース持って行って玄関に置いてきて、いきなり犬の話はしないで、ジュース飲み始めたらラッキーかなと思って次に弁当持って行って、3回目くらいで犬のお話をする。
竹田委員長	特に飼育崩壊されてるところなんか余計そうかもしれないですよ。
国本委員	心を開いて連れてきたかなと思うと、2匹は隠し持っている。それが繰り返されるっていうのが現状ですよ。
降籟委員	基本的に多頭飼育にしても、餌くれにしても、基本的に周りから見ると悪いことかもしれないけど、接するともものすごい優しい人達なんです。だからその人達にしてみるとこの子をどうするんだよ。餌食べないでどうするんだよと、悪い人じゃないなく普通の人よりもっと優しいから対応が難しい。
竹田委員長	センターの機能も含めて、そこに携わる人も変わっていったいかなきゃいけないということになりますよね。
福澤委員	<p>普及啓発に関わってくると思いますが、正しい飼い方の周知とありますが、実はこの正しい飼い方を周知していくためには、今大変に教育が弱いと感じています。</p> <p>これは私専門学校で専門教育関わってまして、専門学生は学びに来てるので興味があり、本当にいろんなことに携わりたいという子が多いですが、小学校とか本当に優しい脳を作る段階の教育が、動物系の教育が足りてないなと感じます。</p> <p>私が小学生の頃は学校動物がいて飼い方が良かった悪かったは別にして、とにかく触る、ふかふかした生きているものに触る、抱いてみる、目と目を合わせてみる。どんな反応をする。恐々抱いてみるというような体験しましたが、今小学校を見ますと何も動物に触れさせない教育が実施されてしまっています。</p> <p>たまにヤギのレンタルをしてみる。それからアヒルを飼い出してみたけど、およそ2年もすればもう担任の先生交代になるのでその後、学校ではもう継がないのでアヒルも引き取ったことがありました。</p> <p>これは何の教育をされてるのかなというような、本当に一時だけ飼えばいいということではなくて、やはり子どもへの教育これは正しい飼い方の周知と言って飼っている大人、責任のある大人に対してじゃなくて、本当に優しくする思いやりを持つ、そういう年代への教育ができればいいなど、全国のモデルになるような優しい心を育てる教育が松本市でできればいいなと思っています。</p> <p>それから専門学生の教育でいいますと日本獣医生命科学大学さんがシェルターメディスンをかなりやられてまして、新しく譲渡に向けて群管理をされて繋げていくというそこのお世話に関わらせていただいていると思うんです。なので、ぜひとも官学連携ではないですが、専門学生にも愛護センターの業務というのをさせていただけたらいいなと感じています。</p>

降籬委員	<p>保護とか譲渡はハード面は作れば機械的にできますが、啓発の部分は相当検討してもらいたいと思っています。</p> <p>愛護会で私は松本市に対して令和4年の2月に陳情書を出しています。松本市健康寿命延伸都市という大前提を打ち出していますが、そこにはなぜ動物が入ってないのか？そういう疑問をなげかけました。</p> <p>あえて言わせてもらおうと菅谷市長が外科医でチェルノブイリ原発なんか行ったりして、そっちの方面からの健康寿命延伸都市ということで松本市は考えたんだろうなとは思いますが、おじいちゃんおばあちゃんが元気で健康にいるためには、小動物がもたらす影響もすごく大きいと思うんです。</p> <p>これが松本市に入らなくてなぜ健康寿命延伸都市なんて言ってるんだろうなと思い、ぜひ今の松本市の保健、この大前提の中に動物を入れてほしい。</p> <p>それを入れることによって、市役所の職員も市民も多分変わっていくと思うから、まずここを松本市に変えてもらうことを真っ先にさせていただいてからだと思っています。</p> <p>例えば我々の愛護会の活動というものをおじいちゃんおばあちゃん60になったから70になったから飼っちゃいけないと思い、正直言って私も飼いたくても飼えないんでいるんだけど、我々の愛護会の活動もどう変わっていくんだってなったら、おじいちゃんおばあちゃんたちが犬猫好きだったら飼ってもらおう。そして仮にピンコロでいっちゃったらワンコ、にゃんこを保護する我々の愛護会の組織を作ったりというふうに変わっていかなければいけないと思っています。</p> <p>捨て犬はゼロに近づいてきてるので、我々の活動も大きく変わるのではないかと考えております。</p> <p>そのために愛護センターというものはよほどしっかりして啓発を考えなきゃいけないと思います。</p> <p>それと先ほどの14ページで補助金の概要対象の猫、市の登録を受けた団体が、21団体で発表ありました。これだけあるのは松本市だけで、まだここに登録してない団体もまだ私の知ってる限りまだあります。</p> <p>愛護センターができれば、私がやりたいことのひとつは、横同士団体同士個人同士の情報を共有して、愛護センターの名のもとにそういう人たちを接着したいんです。</p> <p>松本市だけで21超の団体になっているということはどういうことなのか。みんな個々でやってるからみんなちっちゃな宝を持っているにも関わらずその宝が生かされていない。だからそれを愛護センターは接着剤として、愛護活動のできる愛護センターにできれば、一段と松本が全国に向けての一步秀でた都市になっていくと思います。</p> <p>今から40年前ぐらい前は全国からしつけ方教室を見に来たり、そんな松本市だったんです。そして、愛護団体が公的などところなぜこんなに仲良くできるのって言われたり、それが不思議で各市が見に来たりしました。毎年100件以上100人以上しつけてきて、レベルが上がってきました。だけどそれが大きくずれたのはブリーダーの事件だが、もう一度松本は人にも動物にも優しい日本一の町だという物を掲げて、愛護センターに集まり、それで強い力同じ考え方を持って、これだけのメンバー、これだけの団体があつたらもっと早く日本一の動物に優しい都市にできると思います。そのための動物愛護センターであってほしい。</p>
竹田委員長	<p>動物と人との関わりというか、先ほどの福澤委員も言われたように教育面もそうですし、特に病氣された方も、海外では割と動物飼育されてる方は寿命が延びるという研究が多いですけども日本ではされてないです。</p> <p>でもそういう実際がありますから、松本市が目指してる動物との関わりは決して縁遠いものではなくて、むしろ非常に接点の多い分野ですし、最近の言葉だどワンヘルスなんて言葉が使われてますが、まさにそれを地で行くようなセンターになってほしいというのが今の降籬委員のお話の元だったと思います。</p> <p>それをまたベースにして人と人との繋がりというところをもっと発展させたらなというところだったと思います。</p>

<p>箕輪委員</p>	<p>今後の社会を考えると人が減り、高齢者は増えていき、特に動物にまつわる問題はこの5年10年見ても状況がすごく変わっていくのが早いので、問題が大きくなる前に対応していかなければいけないと感じています。</p> <p>また行政自身も人が減っていく中で、今やってることをフルスペックでできるのか、さらに今よりも更にやりたいことが増えていく中でそれを全部自分でできるのかというときに、行政だけで抱えていくのは、やりたくてもできないという現実と直面する時代が来るのではないかと考えています。</p> <p>そこまでどれだけソフトランディングできていくかという状況も考えていく必要はあるのではないかなと思っています。その上で今回の19ページの図ですとかその辺までの説明をお伺いすると、連携して繋げていくというハブ的な部分があるのかなと思いましたが、どこに何を繋げるかというところを考えていくのも一つかなと伺いながら考えていました。</p> <p>一つお話にも出てきた高齢者の飼育の話というのはとても重要だと思っていて、ただでさえ高齢者の飼育は増えていくというところで、今既にいろいろな問題が出てきていると思います。</p> <p>ある意味多頭飼育とか問題として出てきているところならばアウトリーチもしやすいのですが、普通にきちんと飼っている高齢者の方でピンコロで亡くなってしまったというときに、うちの中にある動物にどうやって手を出したらいいのかというのは行政の権限はありませんし、法的な権限を今すぐに作るということではできませんので、なるべく飼い主の方とかもそこに関わる方に生きている段階でこの動物をどういうふうに、自分がもし何かあったときに誰に対応してもらおうとかどう対応してもらおうかというのを願っているのは、福祉とか医療とかの分野との連携ですとか、人間の病院とかとの連携っていう部分になってくるかもしれないですが、緊急事態が起きたら、家族だけじゃなくて動物のことも考えてくださいというような発信というのも普及啓発の部分に必要なかなと思っています。</p>
<p>箕輪委員</p>	<p>松本市は特に、自治会がすごく強い地域だというお話を伺ってましたので、地域との連携という面でただ地域猫に関する問題、猫に関する活動ではなくて地域を繋げる活動ということで、動物に触れるとか動物を飼育する管理するというのを考える機会にしていくような育て方というのもできるのではかなと思いますし、地域との連携という部分で、避難所に動物が来るということに対しての理解を求めるという意味での連携という部分も強めていく価値があるのではないかなと思います。</p> <p>また民間企業ですね。例えばペットのグッズを売ってるお店とかとの連携で、防災の観点から何か災害が起きたときにどこかに別に備蓄をしておかなくても在庫があるわけです。在庫を活用するというところを行政が活用するのか、民間同士でそういったサービスを作っていくのかというのはあると思いますが、在庫融通してもらえようとするというようなやり方という発想もあるかと思っています。</p> <p>全部を行政だけでやるのではなくて、民間の方々にいろいろな協力をしてもらうとか、例えば学校の中に入れなくても通学通勤の場面で何かその散歩の場面とかで出会うようなところとの触れ合い、何か関わりとかそういった部分で、子供へのリーチをしていくということもできると考えています。</p> <p>先ほどのワンヘルスという言葉がありましたが、動物由来感染症の部分については私元々宮崎にいましたので、マダニの話とか動物由来感染症の話は、非常に身をもって感じていたところがあり、この後気候変動が進んでいく中で今までおそらく松本にはなかったものが出てくることになると思いますので、前もって対応していく周知していくということをはあってもいいのではないかなというふうに思います。</p>
<p>竹田委員長</p>	<p>確か東北の地震の後の愛護法の改正で、危機管理対応が入りました。その中で備蓄もそうかもしれないですが企業との何か連携というそういうパートナーシップを組むって何かそんな動きもあったように思うんですが。</p>

箕輪委員	自治体によって実際にイオンペットとか企業と組んでいるところはありません。それは譲渡活動の部分でもそうですし、そういった物品の話もそう、あとは先ほどのイベントの場所という話がありましたが、地域のマーケットとか様々な場所っていうものを、駆使していくとかそういったことをやっている部分もあるかなと思います。
竹田委員長	これから松本市でも災害対応は、決して飼育の皆さんとの対応だけじゃなくていざというときの餌の確保とか、それ以外のトイレの砂ですとか付帯する必要なものが出てくるので、民間の企業の方からの支援というのは決して避けられないと思うんです。そういったものを今のうちから準備していくことが必要になってくると思います。
北村委員	一般の飼い主様が一定程度のトレーニングとかレッスンを積んだ方が受けるようなものが各団体であるんですよ。それを目標にすることによって適切に飼わなきゃいけないとか、モラルだとかマナーだとかっていうところも身に付いてくるのかなと思います。
竹田委員長	トレーニングをご指導されてる中で、飼ってらっしゃる方がそういった資格を取るにあたってはそこに対するモチベーションっていうのは結構あるんですか。
北村委員	グループなんかでやっているとかあのこみたいになりたいだとか、あんなふうにできたらいいなとか、次入れ替わるときにちょっと上級者と会うと、あの人みたいになりたいとかあの子になりたいだとか、やっぱり自分もそうだし、自分が飼っている愛犬もそんなふうになりたいっていうような気持ちになってくるところがありますね。
竹田委員長	今後センターの中にそういった場を提供してあげると、全体に飼育レベルの底上げとか意識の底上げに近づいていくことですよ。
北村委員	犬にそういうことをやってもらうということだけじゃなくて、うんち拾うときにお座りまでしましょう、うんち拾いましょう、うんちは健康のためにチェックをしましょう、というところから始まるのでしっかりとマナーなども教えながらやっていくということになりますね。
竹田委員長	先ほど国本委員から県のハローアニマルと同じことやってもしようがないというお話がありましたが、そうは言いながらも保護活動も必要だし、譲渡活動もしていかなきゃいけないという、ある程度センター機能に入れるには、飼育スペースが切っても切り離せないと思うんです。その中で、現状の松本市保健所という枠の中でセンターを作るとなると、いろんな食品を扱う部門もありますから衛生的にどうなのかなと。一つの入れ物の中でその機能を個別にすることが果たしてできるのかなんて疑問を持ったんです。
大和（事務局）	前の市の新庁舎プランでは、この場所に新しい庁舎を作って、保健所もこちらに移ってくるというプランでしたが場所がないので、動物舎と検査施設はここには作らないというプランが、今回見直しの了解をいただき、具体的に中身をこれから詰めていくことになっています。 それを踏まえて、合庁の中に入っている保健所の事務所、裏にある動物の保護施設を県からお借りしている状態なので、それを新しい庁舎含めてどうするかという議論の中で、保健所の事務所に隣接する形で動物舎が欲しいと思っています。 県のように、小諸に動物愛護センターがありますが、県の保健所が引き取りをしたりとか、譲渡はハローアニマルもやってますけれども引き取ったり捕まえに行ったりとかという機能は県保健所の方に残したまま、動物愛護センターが別にある形になっています。 一方長野市保健所の動物愛護センターは長野市保健所の庁舎のすぐ横に建物があって、そこに犬舎と猫舎があって犬舎に繋がって運動場も整備されてるという形で結構お金かけて犬舎を直していたりとかしています。 今保護して収容してる犬の数はほぼ少ないです。犬の数が少なくなってきたのか、屋内犬が増えたというのもあると思いますが、昔が私の小さい頃みたいに街を歩けば犬も歩くみたいな状況は今ないです。 たまにノーリードで散歩してるという苦情はありますが、飼い主が全くわからずにフラフラしてる犬は、今ゼロと言っていいと思います。

その中で通常の収容所場所は、そんなにスペース取らないけれど、用意しておかないとシェルター機能だとか何か災害があった時の対応がすぐできないという相反した部分があるので、そこをどう調整取ってくかとかいうのはありますが、基本的には保健所の事務所の隣に動物舎を作っていきたいと思っています。これもまだオーソライズされたものでもなくてうんって言うてもらえている部分でもなくて、何でもないので今福澤委員からシェルターメディスンの話が出たりとか、機能としてはそういうものも絶対必要になってくる中で、どういう部屋が必要で、その各部屋どのくらいの広さが必要でとかというのは、すぐ出せるようにはしていきたいとは思っていますが、その前にどういう機能をもたせて、そこで何やってくかというところが肝になるかなと思っています。

今現状としては保健所含めた庁舎のあり方を議会の方で議論していただく形にはなっているので、それを先行してここでいろいろお話し上げるわけにはいかないんですが、例えば降籓委員から話があった地域猫登録団体の横の繋がりを持てる場を作るべきではないかとかいうようなのはおっしゃる通りだなと思うので、何かそれぞれの団体のやり方等を参考にしたりしてもらったりとか、共通認識に立ってやってもらったりとかっていうことが、松本という地域の力になっていくのかなと思います。

皆さんを1回集めてみるかとか、それから等々力委員がおっしゃったようにアプローチをする仕方をもう少し保健所としても動物愛護センターとしても考えていかなきゃいけないと思いました。

それから竹田委員からもお話ありました、ワンヘルスというのは、これからそれをベースにやっていかなきゃいけないと考えています。

大和（事務局）

今日お示しした資料の中には、ワンヘルスってことは入ってないですが、今年度、松本市感染症予防計画っていうのを隣の課で作りました。

感染症全体語るときにワンヘルス時代の感染症対策というのは、前文の中に入れてもらいました。ワンヘルスの考え方を踏まえた取り組みの仕方も考えなきゃいけないと思っています。

それから民間企業との連携のところ、箕輪委員からもいろいろいただきましたが、アプローチをかける前にあるホームセンターさんから協力させてくれということで、それは動物愛護団体の皆さんも月に1回譲渡会の会場で使わせていただいたり、常設で保健所にいる収容動物の写真を飾ってもらって呼びかけをしてもらったりとか、あるいは保健所でのチラシとか啓発のものをお願いすると、お客さんに配っていただいたりだとかいうような協力をしていただける企業も出てきておりますので、民間の皆様との協働も積極的に考えていかなければいけないと思っています。

保健所も付き合いのある動物愛護会とか、獣医師会さんだとかとは気安く話ができる部分はあるんですが、役所が苦手としてきた民間の皆さんとの協働というか、一緒にやってくというところは意識を持っていかないと多分できないと思いますので、そんなところは考えて入れてもいいのかなという感じで考えています。

降籓委員から話がありました、3年前の〇〇さんのときに21頭動物を引き取っています。本来、5、6頭しか入らない犬舎に21頭収容ができないので県とかを説得して、場所を借りてやりましたが、そのときにあのニュースをご覧になって、ある餌のメーカーさんが、餌を無償で寄付したいということでお話があって、間に動物取扱業の方が入っていただいたんですけども、すごく助かった記憶があります。そういう部分も経験としてはありますので、何か一緒にやれることを手のつくところからやっっていこうかなと今考えているところです。

東條委員

獣医師会でもワンヘルスを何とかしたいというのがあって、福岡はワンヘルス圧倒的に進んでるんですね。

<p>箕輪委員</p>	<p>ワンヘルスのところでの補足といいますか、生物多様性条約の中にもワンヘルスという言葉自体がもう既に組み込まれている状況ですので、今感染症の健康行政というところからの部分のアプローチということを伺いましたが、環境系の部分でも、本来日本の国内ではあまり取り上げられていないので目立たない部分ではあるかもしれないですが、実際ちゃんと見れば書いてあるという部分で、それをある意味使って、環境部門と繋げていくというところで行うと、いろいろやっていくこともできるのではないかなと思います。</p> <p>特に松本市は自然が非常に豊かである一方でそれであるがゆえにやっぱり野生動物の関係というのも非常に厳しい部分というところもあるかと思しますので、動物愛護、もちろん犬猫の話であります、それだけではなくて様々な動物と人との関わりというところを見たときにそういった部分というのはあってもいいかなというふうに思っております。</p>
<p>降籬委員</p>	<p>センターの機能の中に子どもたちの教育ができるそんなソフト部分も持っていてほしいなど、子どもって言うけど、中学生ぐらいになると家庭の中で発言力が出てくるから急がば回れじゃないけれども、全然言うこと聞かない大人より子どもの方がよっぽど育ていけると思うからぜひその辺だけをお願いしたいと思います。</p>
<p>竹田委員長</p>	<p>観光地での対応というのも特にこの松本では大事なのかなと思います。街中の観光地もあれば、山岳上高地などの観光地もあるわけですが、そういったところで感染症もあるかもしれないし、あるいはそこでの生態系に何か影響を及ぼす可能性がなくはないのでそういうところでの普及啓発というのも、同時に大事なんじゃないかなと思いました。</p> <p>あとは福澤委員とか降籬委員が言われてるように教育、私自身もその小諸のハローアニマルと同じ機能がいいのかというのは悩ましいところで、やはりやるからには一つ光り輝く松本らしいものが何か新しくできればなと思ってるところなんです、やはり皆さんの意見をお聞きしながら、当然その保護や譲渡活動は必要とは言いながらも、皆さんの共通した意見というのは普及啓発というところが今日の一番の味噌だったのかなと思います。</p> <p>学校飼育動物も最近非常に減って私自身も残念だなと思ってますが、そういうところにもっと関わるべきだと思いますし、センターの名前は単に愛護センターではなくて愛護教育センターとか愛護普及センターとかなんかもう一歩です。松本のメッセージが伝わるような、名称がその施設のところにちゃんとメッセージ性もあっていいんじゃないのかなと思っていました。</p>